

英語科教育における教育実習生の指導について（3）

－「全体指導」を通じて実習生が学ぶこと－

千菊 基司・多賀 徹哉・幸 建志

教育実習は主に授業観察と授業実習からなり、自分や他人の授業を分析する力をつけ、反省会等も通じて学んだことを、短期間で次の授業に反映させることが求められる。「全体指導」では、授業実習を始める前に実習生全員で同じ授業を観察させ、教案を書かせてみたり、指導教官が与えたいいくつかの観点を柱に討論を経験させるが、実習生は非常に前向きな態度で参加する。特に教育学部以外の実習生について言えば、本校での教育実習に参加する以前に英語の授業について考える機会が不足しているようで、総じて「全体指導」を高く評価する。同じ教材であっても様々な授業展開があることに驚きを感じる多くの実習生が、分析の観点を持って様々な意見を他の実習生に聞くことにより、その現象に納得することができるようである。本稿はその「全体指導」の内容と実習生が「全体指導」をどのように評価しているかについてまとめたものである。

1. はじめに ー実習生の実体から「全体指導」の必要性を考えるー¹⁾

本稿は、授業実習に臨む実習生が『授業を分析する観点』『授業を高めるために有効な観点』を与える「全体指導」の内容をまとめ、また実習生のアンケートから見えた課題を記述しつつ、教育実習のあり方を考えていくための資料提供のために書かれた。

教壇に立った経験がほとんどない実習生が実習中に以下のような問題に直面するのは容易に想像できる。²⁾

- ① 「観察ができない。」目の前で起きていることをただひたすら記述する。従って反省会では何を言っても良いかわからない。
- ② 「教案が書けない。」書けたとしてもそれはメモのレベルであり、50分の授業の流れとしてイメージできていない。
- ③ 「予想していなかった反応・出来事にパニックになる。」自分がテープを持っていくのを忘れてしまう、というレベルから予想外の生徒の答えに立ち往生してしまうようなことまで様々な例がある。さらに実習生は「同じ教材で様々な授業展開がある」ことに驚く。なぜ様々な展開が考えられるか分析する観点を持たないからである。
- ④ 「自分たちが受けてきたような授業を再生産する。」与えられた言語材料を使ってどのような活動を展開するか、についてアイデアがあまり思いつかない。訳せば授業になるという発想は彼らの実体験からくるものである。

「なぜ教案を書くのか」「授業、あるいはそれを構

成する活動の目的は何なのか」「どのように授業を展開するのか」、といったことが理解できていれば、上述の①～④の問題についてある程度の対処ができるようになるのであろう。

もちろん、「人前で話をする事自体に舞い上がってしまう」例もあり、そのような場合、授業実習を多く経験しなければどうしようもないとも言える。「全体指導」は授業実習に代わるものではない。教壇に立って50分の授業を任されて初めて見えることも多くあるのも事実であろう。しかし、前述の①～④については、本校で実習を体験する実習生が一同に集まる「全体指導」の中で意見交換することで実習生の意識がさらに高められたことが実習生のアンケートより窺えた。以下内容を紹介する。

2. 98年度後期の「全体指導」³⁾

98年度前期は、97年度後期に初めて導入した時とほぼ同じ内容の「全体指導」であった。97年度後期の実習生がほぼ全員好意的な評価をしたのと対照的に、98年度前期は教育学部英語教育研究室の学生の多くが「大学の授業の復習である」という印象を持ったことが特徴的であった。⁴⁾その原因は「全体指導」の指導形態が講義形式になりがちなこと、内容が概論に終始して、実際現場で出会う具体例に乏しかったという2点が挙げられよう。

そのため98年度後期の「全体指導」では、できるだけワークショップ形式を中心に、小グループでテーマを与えて討論させたり、その内容を発表させたりして、参加

者が意見を交換する中から学ぶ機会を与えるよう配慮することとした。

本文中のA, Bは、活動の形態を指し、Aは講義形式、Bはワークショップ形式を意味する。また、これ以後本文中の「 」で抜き出した意見は、実習生が「全体指導」についてアンケートに記述したものを引用したものである。そのなかで（ ）の中にあるものは筆者が補ったものである。

全体指導① A 中学1年生の授業観察及び入門期の指導について

(1) 指導の実際

実習生全員が、授業を観察した後、30分程度の講義があり、授業者が入門期の指導で特に注意している事などについて解説する。時間の関係でワークショップ形式を取らず、実習生が観察中に疑問に思ったこと等は観察録に書いて提出し、後日教官が返事を書いて返却する方式で指導した。

(2) 実習生の反応

入門期の言語材料だけでは50分の授業を活発なものにすることは難しい。そのため様々な工夫が必要になるが、観察者によって様々なことが印象に残ったようである。授業で用いられていた小道具、発音指導、なぜそういう規則になるのかをどのように教えるか、生徒の反応をどのように活かすか等、どの学年を教えるにも必要なことであるが、やはり反応が一番返ってくる学年の授業を見たからこそ印象に残ったのであろう。次の実習生の意見から教材研究に関して深い示唆を得たことがわかる。「一年生の英語は全て当たり前のことのように私は思ってしまっ、挨拶の仕方、単語（の意味）をただ伝達することしか考えられない。でも、『なぜ』と言う発想を持つことで、Good morningも興味深い言葉になる。」教える側が好奇心を忘れないことが、学ぶ側が生き生きとする前提ではないか。入門期という他の学年よりは動機付けがはっきり学習を左右する時期の授業を観察することで、そのことがより鮮明に印象に残るようである。ただし、本当のねらいは、以下のような態度で授業に臨んでもらいたいからである。「(前略)このことは別に入門期に限ったことであってはいけないということだと思います。この観察で得たものをあらゆる学年の授業に変化・対応させていくことを心がけたいと思います。」

全体指導② B 中学3年生の授業観察及び反省会・教案作成指導

(1) 指導の実際

全体指導①と同じく、授業を観察した後、1時間程度実習生からの質問に答えたり、討議を深めたりした。また、この授業の教案を各自作成し、教案の書き方を指導した。

(2) 実習生の反応

「教案を作成するにあたって、注意すべき点が多めに多いのに驚きました。でもその一つ一つに納得させられました。(例えば)『(授業の、あるいは授業を構成する活動の)目的を明確に』という指示については難しいようだけれど、実際そうしなければ教案が書けないということに気づきました。」授業の中の様々な活動がどのように影響しあっているかということに気づいた言葉である。

また、自分ならどうする、という観点でメモを書かせて意見交換させたところ、「同じテキストを使っても教える人によって重視する内容が変わることもあり得るのだなということを知った。(中略)目標を持って毎回授業を作っていく大切さを知った。」という反応があり、多数の実習生が集う機会を提供する意味がよく理解されていることが窺える。

1時間の実際の授業を見た後で教案をまとめるとい作業は、彼らが予想していた以上に、紙の上に文字で書かれていることが実際どのような意味を持っているのかを理解するために役に立ったようだ。特に実際の授業を参考にして、時間を意識して活動内容や説明内容を考えたのが実際の授業へのよい準備となったようである。

全体指導③ B ビデオによる授業観察(中学2年生)及び討論

(1) 指導の実際

授業観察の前に、班別に観点をはっきりと例示して、ビデオ録画した授業を観察させた。今回は、<1>4技能のバランスのとれた授業、<2>学習者中心の授業、<3>同じ教材で別の展開は、の3つの観点を3つのグループに分けて与えた。このことは、観点を与えたものに限定するという意図ではなく、実習生は自分の与えられた以外の観点を、意見をまとめても良いことを伝えた。

リアルタイムの授業観察で前もって観点を与えると、授業者がそれを意識するため自然な流れが損なわれる可能性があるが、ビデオ録画された授業の観察だと、指導教官があらかじめ授業者の意図などを

理解した上で観点を設定できる。今回は広島大学附属東雲中学校の97年度公開授業のビデオを用いた。教案もあり、公開授業後の分科会で出された意見も参考にしたので、実習生に提示する討論の柱が設定しやすかった。

(2) 実習生の反応

「この全体指導で、(4技能のバランス、学習者中心であることについて、という) 2つの観点が与えられなければ、私のその後の授業観察の価値は半減したと思う。このように新しい(私にとっては、であるが) 観点を与えられたことで、『よい授業』とはどういうものかということが少しは分かったのではないかと思う。」二つの新しい観点を持つことで様々な授業展開が生まれる軸が定まったようである。授業観察の時に観点を与えることの必要性を確信させてくれる意見であろう。

次のような批判的な意見もある。「まず学習者中心の定義を考えるとところから始めなければならないと感じた。授業中に生徒の活動が多ければ生徒中心の授業だと果たして言えるのだろうか、という疑問を持った。」その通りである。学習者の言語操作能力や知識、性格等も十分に考慮しなければならない、という観点が、実際の授業でどのように反映されているかを観察させたかったのである。そして観察の前に「この授業が学習者中心といえるのはどのような点においてか」、という発問をした。その時「学習者中心」という言葉を与えただけで、それがどのような意味か、ということについては出てきた意見を集約することで定義していくと述べたが、実習生の十分な理解を助けるには、不十分であったのだろう。

ひとつの討議の柱は、限られた言語材料でつくった人工的な会話で発話を生徒にさせることの意味であったが、様々な意見が出た。結局は学習者の言語操作能力をどのようにとらえ、授業や活動の目的をどこに置くか、が大切なのであって、不自然さの許容範囲が人それぞれであるために答えは出そうにない。その中で「おもしろかった、で終わるのではなく、必ず何らかの形で英語が残るような授業づくりを目指したい」という一定の方向付けができて良かった。

全体指導④ B 発問の工夫について

(1) 指導の実際

昨年度の「全体指導」での内容とほぼ同じであるが、前期の実習生の意見を参考に、実習生がお互い

に意見を交換できるような時間を設定した。

(2) 実習生の反応

「(教材を与えられた後、) 最初に自分なりの発問を考えてから、周りの人とプリントを交換して他の人の発問の作り方を見るという方法はとても勉強になりました。やはり自分一人で考えた発問はどれも視点が同じで内容に広がりがなかったので、いろいろな人の質問を見ることでいろんな角度から考えることができました。答える生徒側のことも考えて、発問を考えなければならないことがわかりました。」答える生徒がどのような学習レベルにあるのか、教材の特性は何か、発問をどのような活動(大意理解か、前時の復習か、鑑賞か)で行うか等、様々な発問は適切な場面で用いられてこそ価値がある。

3 「全体指導」の評価

(1) 予想された不満と今後の指導で留意すべきこと

98年度前期の実習生の回答したアンケートに見られた不満は主に4つあったが、改善の方向で内容を検討している。

その一つは「教官の『一方的な』話で終わるので、実習生同士の意見交換や教官への質問の時間が少ない」という指導形態に関するものである。教官の意見が聞きたい、というコメントも多い。できるだけたくさんの意見を参考にしたい、という実習生の願望であろう。

次に、「大学の講義で概論はやったので、具体的にどのように味付けをしたらよいのかというヒントを得られるような内容にして欲しい」というものである。この視点に関しては、「同じことを何度もする必要はあるのか、という意見もあるかもしれないが、私は同じことだとは思わない。」という意見もある。この不満については「全体指導」の指導形態をワークショップ中心にすることで今後もかなりの部分が解消できると予想される。

三つ目は、「『全体指導』が自分の担当する授業実習の当日に設定されている場合があり、集中して参加できない」というものである。これは初めて教壇に立つ前に人の話を聞ける状態ではない、というナイーブな実習生の一面が感じられる。しかし「全体指導」でなくとも、グループ内の他の実習生の授業を自分の授業実習の前に観察しなければならない、ということは当然起こる。気持ちは分からないわけではないが、そのこともきっちりと指導していかなければならない。これに類して「二週間のただでさえ忙しい実習期間にやるが増えてたいへんだ、

というものもあろう。授業をやる前に必要な指導であるという認識を持たせるような内容を目指していきたい。

四つ目は、『『全体指導』のおかげで授業実習の数が減った』という不満である。これは勘違いなので、われわれの説明が至らなかつただけだが、全体指導は実習開始後の指導教官の授業観察期間中に、観察する授業のない（または少ない）時間帯をねらって実施するものである。全体指導の導入によって、授業観察は従来の30時間から25時間に減らしたが、授業実習に影響はない。「全体指導」の意義を説明する時に、「授業実習の数が限られている中で最大限の効果を狙うため」という説明がその原因であろう。「授業実習への助走期間として授業観察を行わせるが、その効果を高めるため」という説明をしていく必要がある。

(2) 出身学部による反応の違い

全体的な傾向として、教育学部以外から来る実習生は実習に来る前の段階で英語教育について考える機会や刺激が少ないようで、総じて「全体指導」を高く評価している。これは現行の免許制度によって広島大学では「英語教育学概論」を半年、2単位履修することが必修であるが、それだけでは自分の授業を客観的に振り返る力をつけるには不十分であることが実習生の反応から読みとれる。もっとも、後期に実習を経験する者にとっては、大学で理論を学んでから実習で実践するまで実に1年以上の時間差があるため「大学で学んだことを忘れてしまっている。」そのことも「全体指導」を高く評価することの背景にあるのであろう。

一方、教育学部の実習生は実習に来る前から英語教育にも意識が高いし、指導教官の指導方法にも興味があるようで、「もっと教官の意見が聞きたい」という意見があった。また、「全体指導」の評価は、「もっと実習生が意見を交換できる時間が欲しかった」「大学の授業の復習であった。」という評価を述べるものが目立った。これは大学で聴講する授業を考えれば、こちらの用意したものの内容によっては当然の反応とも言える。特に全体指導の内容が概論で終わらないよう、内容の検討を継続する必要がある。しかし、中には「色々な機会を通じて、附属校の教官の英語教育に関する考え方がより深くわかってよい」というように、「全体指導」は今後自分たちが英語教育に関わっていくうえで非常によい刺激になる、という捉え方をしている実習生もいる。

(3) 制度上の限界と今後の課題

「全体指導」①～④は、3人が分担して行っているが、そのことについて評価が二つに分かれている。「全体指導をすることによって、教生が平均して同じことを学べるのはとても良いと思う。担当の教官だけではどうしても偏りが出てくると思われるからだ。」という意見がある一方で、3人がそれぞれの話の内容につながりを持たせていないため、「独立している」ものを関連づける工夫が足りないという意見もあった。

具体的な解決策としては、一人の教官が「全体指導」を担当し、他の指導教官も「全体指導」の講義・討論にも参加する。小グループでの討論の時は他の教官もフォローする、ということが考えられる。このような指導体制であれば、「全体指導」の内容と授業実習の指導をより効果的に関連づけることができる。しかし、この解決策を実行すると、かなりの数の教官の時間割を大幅に変更する必要が生じるため現実的ではない。2週間の実習期間内に「全体指導」を実施することが前提である限りこの問題の解決は難しそうだ。

内容については、ある実習生については既に持っている興味や関心をより深められるような、また別の実習生には新たに興味や関心を啓発できるような指導が求められる。ただ、「全体」指導には当然限界があるわけで、「全体指導」はあくまで啓発の場であって、後は個別に指導していく他はあるまい。ある実習生が次のように述べているが、「全体指導」の意義をよくとらえている。「全体指導はひとつの道標であって、個人個人が考えて作り上げる一つの基準としては大切だと思いました。全体指導をきっかけに自分はこう思う、などの意見や、自分だったらこうやりたいという願望が出てきて、それについて指導されたり直されたりして成長していくものだと思いました。」

実習生が持つ「不満」は、「全体指導」の内容よりも指導形態にあることが多い。「全体指導」を通じて得られる刺激は、我々の予想を超えているようである。彼らが自らの授業を、見つめていける場を提供するために、実習生がグループを越えてお互いの意見を交換できるような場を、今後よりいっそう増やす方向で考えていきたい。

アンケートが自由記述であることや、サンプル数が非常に限られているということもあるので、まだまだこれからも継続してデータ集めをしなければならぬ。今後は、アンケート調査において、例えば、

授業実習を通じて、「全体指導」のどの活動あるいは指導内容が、実際の教授行動にどのように影響したか、あるいは「全体指導」の何が役にたつて、なにがそれほどでもなかったか、等、具体的にデータを蓄積し、実習生を指導していく時に指導教官が共有できるようにしていきたいと考えている。

教えたいことを書いてだけで、時間を意識して教案を作ったこともなかった」と解答しているのと対照的である。

注

- 1) 本校英語科では10名から20名程度の実習生を5名程度のグループに分けて2名の教官が担当し、授業観察や授業実習を指導している。「全体指導」とは、実習生が全員で講義を受けたり、テーマを与えられて観察した授業を題材に討議したりすること等である。その内容は①授業観察の目標を明確にすること、②指導案通りに進まないときの対処法をあらかじめ考えさせた上で授業に臨ませる、③発問の仕方について深く考えさせ、授業が単調にならないように準備させる、というものである。「全体指導」の主な利点は、複数の教官の意見を聞き、他の実習生と意見を交換することで、授業に臨む意識を変えるきっかけになることである。

全体指導開始の背景、全体指導のねらいの詳細については本紀要第38巻(pp. 137-141)を参照されたい。
- 2) ①～④の記述は98年度後期に「全体指導」を受けた実習生のアンケート記述の中の、「全体指導」にどのような効果を感じたかという問いに対して、「全体指導」を受ける前の自分について記述してある答えから抽出した。

本校で教育実習を体験した学生数は、98年度前期が12名、同後期が10名(本校卒業生を含む)で、アンケート回収数は前期が8名、後期が9名であった。
- 3) 97年度後期・98年度前期に実施した全体指導の内容は本紀要第38巻を参照されたい。また、事務手続き・実習の基本的な心構え等を概説する教科オリエンテーションの内容については、本紀要第38巻と同様省略してある。
- 4) 教科教育学科英語教育学専修の学生から回答があった5部のうち、3部において、「全体指導」の内容は大学でも学べることだ、という評価がされていた。その3部のうちの1部は、復習とはいえ、実習を前にたとえ「もう一度」であっても有意義であったという評価であった。また、教育学科からの2名の回答については、教案作成の指導については大学での復習であるとしていた。これは文学部のある学生が教案作成について、「大学(の授業)ではとにかく